

実践報告

看護セミナー

「がん遺族の悲しみを癒す医療を-最愛の妻を看取ったがん専門医の想い」

—上映会、遠隔配信による参加・視聴者の学び—

加藤千恵子¹⁾* 伊藤亜希子¹⁾ 鈴木朋子¹⁾ 鈴木捷允¹⁾

¹⁾ 名寄市立大学保健福祉学部看護学科

キーワード：看護セミナー 大学生 がん看護 遠隔配信 学び

1. はじめに

本学、看護学科では、北海道看護協会上川北支部三職能委員と名寄市立大学コミュニティケア教育研究センターの共催により看護セミナーを年1-2回開催している。

今年度は、垣添忠生氏を迎え、「がん遺族の悲しみを癒す医療を-最愛の妻を看取ったがん専門医の想い」と題して、ご講演をいただいた。コロナ禍のため、遠隔にて、上川北支部会員、および名寄市立大学教職員、本学学生、周辺施設や学校に周知し、出張開催2回、本学上映会1回、ムードル配信、YouTube配信で開催した。

現在、2人に1人はがんに罹患する。講師の垣添先生は各事例のがん治療を通して治療のあり方に葛藤を抱きつつ、最愛の妻を看取り、自身もがん患者である^{1), 2)}。家族としての思いや当事者としての思いを大事にした医療を考え、その時々心の持ちようを四国巡礼の旅の中で表現している³⁾。垣添先生の生き方やご経験の一端を学び、看護職者としての感受性を磨き、今後の学びや仕事に活かすヒントをいただけたと思いい講師依頼し、御快諾をいただいた。

コロナ禍で、一般市民にも広報活動をしたが、結果、遠隔配信と上映会(出張も含む)での対応となり、申し込みいただいた施設、学校に案内し、上映会参加か、遠隔視聴の選択をしていただいた。学生は成人看護学概論、国際看護学などの講義としてムードルを介して視聴した。

視聴後、アンケート調査を行い、アンケートで得られた結果から、看護セミナーにおける学びを明らかにしたいと考える。

2. 看護セミナー開催概要

1) 上映会

- (1) 日時；令和3年9月25日14:00～15:30 場所；名寄市立総合病院ICU会議室
参加者9名
- (2) 日時；令和3年10月3日14:00～15:30 場所；美深厚生病院応接室。
参加者3名
- (3) 日時；令和3年11月14日13:00～14:30 場所；名寄市立大学図書館大講義室
参加者10名(高校生を含む)、計22名が参加した。

2) 学内配信

- (1) 日程；令和3年9月25日から11月14日まで。ムードル配信。
- (2) 視聴者；

*責任著者 E-mail:chiekok@nayoro.ac.jp

視聴者168名中教職員2名、学生166名(1年看護54名、2年看護50名、3年看護47名、4年看護15名)であった。

(3) その他

総合の視聴回数291であった(学内視聴者を含む)。

3. アンケート結果

上映会と学内配信に分け、アンケート結果を掲載する。参加者の記載番号はランダム表記である。

1) 上映会

(1) 看護セミナーを知った方法

ポスター23.8%(5/21)、チラシ14.3%(3/21)、大学HP4.8%(1/21)、その他57.1%(12/21)で看護協会からのお知らせ(4)、施設・研修案内(2)、職場集会、病棟のお知らせ、大学郵便物、学校からの案内であった。

(2) 参加動機

現在医療職をしているから68.2%(15/22)、講師・テーマに興味あり50.0%(11/22)、将来に役立つ27.3%(6/22)、すすめられた22.7%(5/22)であった。

(3) 開催時期

大変良かった33.3%(7/21)、良かった61.9%(13/21)であった。記載事項は表1に示す。高校生は受験前に視聴できたこととコロナ禍での対面からの変更であった事を受け入れていた。また、感染対策があり、上映会も安心して参加できたことが挙がっていた。

(4) 講演の感想

大変良かった66.7%(14/21)、良かった33.3%(7/21)であった。記載事項は表2に示す。その内容は、概ね好評であり高校生は、死について考える機会になり、医療職者はコロナ禍での面会を振り返り、会えるときは死際である現状から家族看護のあり方を考える機会となっていた。また、がん患者を家族に持つ方は当事者意識で視聴し、家族看護の必要性を考えることができていた。

(5) 所属

参加者の所属は、看護師50.0%(11/22)、准看護師13.6%(3/22)、看護職9.1%(2/22)、助産師9.1%(2/22)、高校生9.1%(2/22)、薬剤師4.5%(1/22)、介護職4.5%(1/22)であった。上川北支部参加者は81.8%(18/22)であった。

(6) 参加者の地域

名寄市からの参加は72.7%(16/22)、名寄市以外の参加は27.3%(6/22)で、内訳は美深町(4)、下川町(1)、未記入(1)であった。

(7) 今後、希望する看護セミナーのテーマ

一覧を表3に示す。様々な希望があり、中でも、高校生の参加を見て、自分の存在価値や精神面の研修を求める意見もあった。

表1 開催時期などに関する意見

コロナがなければ大学でできたので少し残念でした
コロナの影響は判断が難しくできる範囲の開催で良かったと思います
対策のとれている環境でのセミナーは安心できるものだった
コロナ禍ということで仕方のないことだと思う(高校生)
受験前に見ることができて良かった(高校生)
WEB開催;感染予防に適した方法で安心して受けることができました

表2 上映会視聴後の感想

大変良かった
実際に垣添先生にお会いしたかったです、とても見やすい画像で良かったです
グリーフワーク、グリーフケアについて聞いて良かった
勉強になりました
講演聴き入りました
大変勉強になりました
内容が良かったです
リアルな体験談が多くて共感することが多かった
とても素晴らしかったです
とても聞きいってしまう内容だった
今後の経験となる内容だった
良かった。とても。できることなら実際に会ってみたかった（高校生）
死について考えることができた（高校生）
心の通い合いはどんな時でも大切なことだと感じた（高校生）
生涯を通してやりたいことをみつけることも大切だと思った（高校生）
現在、コロナにより入院患者の家族は原則面会できません。面会許可が下りるときはもう命が危ないと予測された時です。「世の中には配偶者を亡くして苦しんでいる人がたくさんいる」看護の対象は患者だけでなく家族も含まれると改めて思いました。家族看護とは…自分には何ができるのか考えていこうと思います
良かった
がんで亡くなった方の家族のケアも必要だと改めて感じた
周りの方のサポートも必要であるが、家族自身の立ち直る活力というか、悲しむ時は悲しむ、泣く、叫ぶという行動も立ち直りの過程に必要なと思った
自分も祖父を昨年亡くして、振り返るとグリーフワークしていたなと感じました
病院でターミナルをお受けする際にご家族は覚悟が決められず、在宅での看取りは皆無です
病院で亡くなるということを担保にグリーフワークを行わないのだと思います
コロナ禍でベットコントロールも以前と違ってきています。病院でもACPについて考えなくてはならないと思いました
自身もがん患者を持つ家族という立場であった事もあり、自分の時はどうだったかなあと思い出してしまいました
未評価
悲しいを癒す医療という内容にはあまりピンとこなかったが、家族という立場の方が1年たって自分が思っている以上に立ち直っていないことにびっくりしましたが、その立場にならないとわからないと反省しました

表3 今後、希望する看護セミナーのテーマ

がんサバイバーの気持ちや、病気の向き合い方など
知的障害など疼痛を訴えられない人に対する痛みの看護
在宅ケアについて
身近に主たる介護者がいない（介護力が低い）中で在宅で終末期を過ごすことができたケースなどあれば
災害に関するもの
テーマがここ数年で一番良かったと思いました
精神をテーマにした話を聞いてみたい
ジェンダーについて
今回のセミナーに高校生がきていました。将来について不安をもち悩みを持っている年頃だと思います。命について自分の存在価値の大切さ、気づいてもらえるようなセミナーを聞きたいです

2) 学内配信

(1) 看護セミナーを知った方法

教員からの紹介 95.2% (160/168)、ポスター2.4% (4/168)、大学HP2.4% (4/168) であった。

(2) 参加動機

すすめられた 61.3% (103/168)、現在医療職をしているから 45.8% (77/168)、将来に役立てる 52.4% (88/168)、講師・テーマに興味あり 28.0% (47/168)、その他、授業の一部であるため 3.0% (5/168) であった。

(3) 開催時期

大変良かった 42.2% (70/166)、良かった 56.0% (93/166)、あまりよくなかった 1.8% (3/166) であった。表4に記述を示す。記述率 9.0% (15/166) であった。

遠隔配信の良さで、繰り返し聞くなど、自分のペースで聞くことが良いなど、対面では得られないメリットがあった。実習前に、また、後期へ向けた気をひきしめる時期でよいとしたものがあった。学生の実習スケジュールの違いにより、実習中の者は実習前に視聴したいとする希望があった。

表4 開催時期に関する記述

大変良かった
ちょうど良い時期だと思います
1年生のうちに話が聞けてよかったです
後期に入るタイミングだったので良かったと思います
癌は遺伝が大きく関係しているのかと思っていました。生活習慣で防ぐことができることを知り、看護を学ぶ身として自分自身でも気をつけたい、自分の家族にも伝えていきたいです。そして、奥様の療養の様子を聞いていると、治療がどれだけ苦しくて辛いことだったのか考えることができました。自分の身内に癌を患う人がいた時に何ができるのか考えさせられました。自宅に帰ってから、沢山ご飯を食べたり、最期の前に起き上がって手を握ったり、医療では説明できないことが起こるのだなと思いました。心を通わせ、親身に寄り添うということはもしかしたら治療よりも効果があるのかもしれない、と気づかされました。貴重なお話をありがとうございました
成人看護学実習の前に受講することができ、セミナーでの学びを実習でも役立てたいと感じたため、開催時期は大変よかったです
時期的に対面で講演を受けることはできなかったのが残念でしたが、もう一度聞きたいところは繰り返して聞くなどして、自分のペースで視聴することができたので良かったです
後期始めに気を引き締めることができたためです
良かった
この時期で良かったと思います
忙しい過ぎないこの時期でちょうど良いと思います
老年実習前にこのお話を聴きたかったです
勉強になりました
実習が始まる前にセミナーを聞いてゆっくりと視聴出来て良かったです
あまり良くなかった
実習期間でゆっくりセミナーを見ることができなかった
評価未記入
教員からメールが来るまで存在を知らなかった
実習期間に重なっていた

(4) 講演の感想

大変良かった 66.7% (136/167)、良かった 33.3% (31/167) であった。

感想の記述率は 43.7% (73/167) であった。コード「293」サブカテゴリ<155>で、主なカテゴリ《24》コアカテゴリ【4】であった。記述内容のカテゴリ化したものの主なコアカテゴリ 4 つの構成を示す (表 5)。

表 5 遠隔視聴の感想記述の主なコアカテゴリとカテゴリ

カテゴリ 《24》	コアカテゴリ【4】	
がんは身近で、誰でも罹患する恐れがあり、多くいるが、生活習慣病で、生活指導、予防行動で減るとわかり、勉強になる (21)	人体のすごさ、がんの知識 (生活習慣の改善を含む)、看取りの心情を学び、寄り添い、患者と家族の心のケアをすることが大事と学び、今後役に立ち、勉強になる (83)	
がん経験者から看取り、遺族のリアルな心情を学び、興味深く、勉強になる (16)		
本人の希望を聞き、その人らしい最期 (生き方) に寄り添い、サポートすることは本人のためになり、遺族の心のケア、支援が重要である (16)		
その人らしい最期に伴せと気づき、貴重な経験に感動し、必要性がわかる (8)		
人体を構成するものは強靱で人体の凄さを感じ、生きる希望を持つと生きられる可能性も持つ強い存在と回復事例から学ぶ (10)		
多くの知識を学び、今後役に立つ内容で、勉強になり、具体的にどうするか学び続けるモチベーションに繋がる (7)		
緩和ケア、がんに立ち向かうには家族の存在が大きな力になる (3)		
今までの知識と照らし合わせ、それ以外も知ることができた (2)		
グリーフワークに取り組むまでの過程、実際のグリーフワーク、遺族の悲しみや喪失感、つらさからの立ち直りと人生観の変化の過程、がんは予防できることなどが印象的言葉・内容で興味がわく (19)		印象的言葉、内容とすべて経験 (がん患者、遺族、治療者) した当事者である講師の生き方や死生観に感銘を受け、故人や闘病中の家族を想い、心の持ち方や社会に対する考えに影響する (66)
講師の実体験の話に同調し、気持を理解し、生き方 (看取り、死の準備も含め)、死生観、人生観に感銘を受け、尊敬し、感動した (16)		
身近な家族をがんで亡くした経験の過程やその時の感情を想起し、その該当者は多く、話が励みになり、心の持ち方を変化させる (16)		
死のあり方、がんという病気との対処、家族の考えを知る、ケア効果と自分の責任と立場、自分なりの考えを考える機会となる (7)		
気負いなく生きづらいつ感じない以前と同じ生活ができる理解ある社会、自分らしい最期を迎えられる社会が大切との考えに感動し、変化してほしい (4)		
周到的準備を学び、心構えができた (2)		
全てを経験した当事者だから、心が癒せるか必要な対策がわかる (2)		
個人の尊重と心身をサポート (苦痛の軽減、最大限の力を発揮し、気持を前向きに「生きたい」と思える) 援助ができる専門職を目指す (19)	将来、ケア専門職 (看護師像) としての役割、仕事内容の意義と在宅医療の理想実現への可能性、グリーフケアの大切さを明確化した (56)	
在宅医療の理想の実現に向けた重要性、必要性、可能性の明確化 (12)		
グリーフケア・グリーフワークを学び、遺族のその後の生活や身体・精神・社会・霊的な側面のサポートは重要で、在宅医療、心のケアの必要性を感じ、活用したい (12)		
知識・技術を持ち、広い視野で理解し、役立てる (6)		
予防活動 (生活指導) で健康を支える (5)		
生き生きと過ごせる、心のよりどころとなる環境をつくる (2)		
貴重な話を聞いて嬉しく、感謝 (32)		貴重な話を聞き、嬉しく、この機会に感謝し、限りある貴重な時間の大切さがわかる (38)
がんと向き合う貴重な時間に感謝 (3)		
限りある毎日、時間を大切にする (3)		

4. 考察

1) 上映会参加者の学び

コロナ禍で面会の扱いを振り返り、患者と家族の分断について考え、看護のあり方の原点を具体的に考える機会を得ている。今後の看護に直接的に影響するものと考え、この講演を出張上映会などで見てもらい、日々の看護の改善点や気づきに繋がる機会づくりにはなったと思う。その気持ちを維持し、実際にハードルをクリアするまでの行動力と意見の反映ができることを期待したい。

2) 学内配信視聴者の学び

学生は感受性が鋭く、いつ自分ががんになってもおかしくないということを受け止め、これから就く職業人としてどうあるべきかを真剣に考える機会となっていた。また、身近な家族にがん患者がいた、もしくはいて、その時を想起し、当時の記憶をたどり、当事者意識と共感に基づく学びとなっていた。

講師の言葉は講師自身ががんの当事者であり、がんを治療する側でもあり、遺族の立場でもあるという、全ての立場が分かった者の言葉であるからこそその説得力があり、印象深く、心に響き、学生の感情が動いた講演であったと考える。

講師の生きる姿勢から人生の先輩として生き方モデルとして、死際まで決定し、子どもがいない場合の遺産や葬儀に関する考え方、物質として自然の一部に帰っていくということが具体的に語られており、学生の死生観に大きく影響し、参考になったことがわかる。

がんの予防に日々の生活のあり方が重要で、睡眠、運動、食事の基本を大事にして、早期発見、早期治療、そして、当事者の最後をしっかりと寄り添う尊厳死、その後の遺族の心のケアまで、まさしく、切れ目のないケアを教えてくれた講演であったと考える。

講演の内容は多岐にわたり、視野を広く持ち、社会的経済的側面も考えて、がん治療は経済問題でもあり、そのコスト面からも予防の大事さ、がんについての教育の大切さ、方向性をしっかり持つことについて、登山準備をして海に向かう場面のスライドを示し、「進む方向性を誤るな」というメッセージをいただいたと考える。

今後も、学生の学びのモチベーションを刺激できる内容を企画していきたいと考える。

5. まとめ

1) 看護セミナーでの学びは多く、職業選択におけるモチベーションを増す機会になっていた。特に、その患者に寄り添い、ニーズを満たせる社会に変化できることが重要であり、看護者としての生き方、がん患者とその家族の心のケアができる専門職者になるモチベーションを増すことができる機会になっていたと考える。

2) 自身の家族のがん看護の場面を想起し、看護のあり方、人生の終わりのあり方などモデルとしての様を具体的にみたことで、職業人(看護職)となる自分にできることは何か思考を整理する機会となっていた。

3) 学生は講演を聞き、印象的な講師の言葉から生きる事、死ぬこと、専門職者としてどのように仕事をしていくのか、「驚き、悲しみ、楽しい、責任、喜び、不安」などの感情が動き、心に響く内容をしっかりと受け止め、学ぶことができていた。

4) 今後の企画の方向性として、精神面、介護者がいない場合の看取りの看護、命、自分の存在価値を高められる内容、ジェンダーなどのニーズがあり、継続は必要である。

おわりに

看護学科看護セミナーに上映視聴および遠隔視聴後の感想から学びと今後の活動に向けた希望のまとめについて述べた。

今後も看護セミナーの事業を継続し、看護職者への日々の仕事のあり方やワークライフバランスに至る過程を振り返り、対人関係職としての感受性を高められる一機会とできるよう参加者のニーズに即した活用としていきたい。

この看護セミナーの開講にご協力いただきました（公財）日本対がん協会会長秘書の森田幸子様、調査にご協力くださった皆さまに心より御礼を申し上げます。

付記

本稿は、名寄市立大学コミュニティケア教育研究センターと共催事業である。

引用・参考文献

- 1) 垣添忠生（2004）患者さんと家族のためのがんの最新医療、岩波書店
- 2) 垣添忠生（2009）妻を看取る日、国立がんセンター名誉総長の喪失と再生の記録、新潮社
- 3) 垣添忠生（2016）巡礼日記 亡き妻と歩いた 600 キロ、中央公論新社

